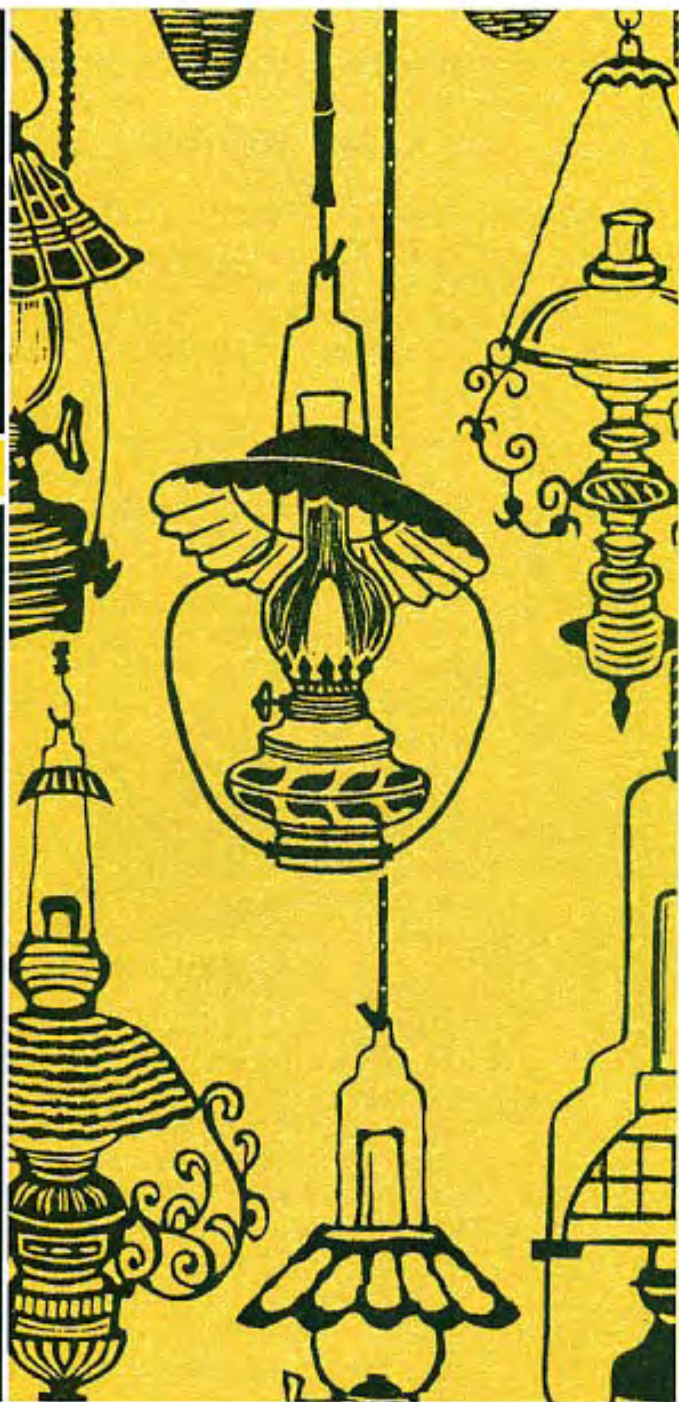


春燈

4
月号

APRIL 2007



成瀬櫻桃子の句

鞆の津や春幻の韓の船^{から}

春燈関西大会（平成十五年五月）「鞆の浦」

平成十四年五月鞆の浦で、関西大会が開催された。櫻桃子先生にとつて、最後の大会であつた。体調の万全でなかつた先生は、奥様ご同伴の出席であつた。

鞆の浦は、歴史上の数多の遺跡があり、朝鮮通信使が潮待のため宿泊した福禅寺は真向いに仙酔島があり絶景。掲句は存問で、豊かな抒情と限りなく広がる余情は、往時を偲び、師との一時の至福を懷古するものである。

鈴木鳳来

成瀬櫻桃子の句

空港のかかる別れのソーダ水

自註現代俳句シリーズ『成瀬櫻桃子集』昭和五十二年（昭和三四年作）

一ドル三百六十円の昭和三十年代、海外渡航はまだ一部のビジネスマンに限られていた。高度成長期の企業戦士として活躍されていた師の三十代の作である。「かかる別れ」の措辞は、映画の一シーンを思い起すのに十分なドラマ性があり、読者の想像力を掻き立てる。季語のソーダ水が絶妙な余情を醸し出している。空港を訪れる度に、この哀感を秘めた句が思い出される。

ト 部 黎 子

西ヶ原日記 (二九)

鈴木榮子

いつ吹きし春一番かな一日了ふ
手回しの鉛筆削り春一番
耳で計る体温計や春の風邪
買ひ薬で治らぬ風^{ふう}邪^{じゃ}叱りけり
熱もなく頭痛もなくて風邪は風邪

葛湯溶く柔らか過ぎず固からず
この横町鬼居ぬらしや鬼払はず
東北線のレールの継目冬深し
雛人形弟妹なくて溺愛せし
苗札を立てたし隣家花大尽
春夕焼万象夕日染めにけり
春夕べ暖簾かけたる天ぷら屋

花 明 り

小 泉 貴 弘

吉野桜に西行の空ありにけり
吉野山さくらさくらと暮れにけり
花月夜西行鼃肩つどひけり
花明りたつた一度の命なり
一目千本谷風に舞ふ花びらよ
花筏西行庵を発しけり
花の下唇に花びら触るるまで
たましひの抜けてたゆたふ花の下
うつし世と彼岸のとばり花吹雪
花吹雪に押され吉野を去りにけり

白 鳥

戸 辺 信 重

髭剃つて大白鳥に会ひに行く
輝きて天翔くる船白鳥来
白鳥の餌の糲運ぶ一輪車
餌を啄む白鳥の静鴨の騒
白鳥や飛ぶも泳ぐも家族ごと
向き合つて白鳥夫妻羽撃ちけり
葦陰に白鳥一家宿りけり
白鳥と目の合はぬさへ愛しけれ
帰る白鳥一羽も欠けず渡るべし

当月集

鈴木 榮子選



○ 横田 初美

染め糸のしたたるみどり冴返る

紐を組む駒の音色も春めけり

旗風に手末^{たなすえ}冷ゆる初葉師

針祭日のまはりきし母の墓

余寒なほ土を啄む日の雀

○ 山川 好美

余寒なほ波のひねもす城ヶ島

早春や浦賀港より渡し船

菜の花黄島の祠に古ぶ鈴

寒明くる沖のタンカー音もなし

薄墨の伊豆の大島鳥雲に

○ 君塚 敦二

山茶花や木戸を開ける表門

一人訪ふ本陣の冬日和かな

上段の間二の間三の間冬暖

冬麗や利根を渡れば取手宿

斉昭の歌碑に冬日の零れけり

○ 久永 淳子

湖ぬくしわかさぎ命拾ひけり

公園に風あまりあるさむさかな

歌碑よみて風に身さらす余寒かな

公園の茶のすぐ冷めて缶軽し

白熊の氷を採す日和かな

○ 佐々木 新

凍滝の念ひ秘めたる鋼色

寒行の四角に夜を曲り行く

都鳥うはさは嘘^{デマ}Eメール

一人来て連れ立ち帰る白朮^{オトコシ}詣

なまはげや男鹿の男衆皆のつば

春燈の句

鈴木 榮子選



初湯して日本人とぞ思ひける

東京 向井 芳子

紅椿唐人お吉の墓に添ふ

針供養家計とりなす妻のゐて
糸遊や舟の釣座も銭の運

棚繞む正子の書斎春障子(武相荘)

臘梅の透く黄金を朱泥壺

神奈川 松波とよ子

鉤跡著き立木観音春日射

重ね絵馬ひねもす均す梅の風

大蕪薺下げ退院を告げに來し

歌舞伎座も鬼の棲むてふ追儼式

三世代恋のかるたに興じけり

寒明けや鳥居派画く絵看板

待春の光が包む孕み牛

鎌鼬阿修羅の像に走る鱗

京都 岡田 宜紀

雪原の鶴と紛ふや会津城

閨に通ふ風あり恋の雪女郎

やはらかき庄内なまり寒梅忌

生えかはる子の齒を投げる深雪晴

岡田 宜紀

凜と立つ一本杉や寒梅忌

目刺食ふ父の姿に似せしは神

一書読み了へたる寒の暮色かな

大太鼓禰宜が一ト打ち年変る

兵庫 北村 桂石

受験子の人よせつけぬ背中かな

女正月骨董市に夢二の絵

鮪の尾耀の証に断たれけり

一領具足の裔を自認の懷手

寒蛭家郷なればの夜の黙

獵犬の一徹の貌主に似る

東京 中澤 弘

埼玉 市川 玲子

福島 物江 康平

余言

鈴木 榮子

湖ぬくしわかさぎ命拾ひけり

久永 淳子

わかさがどの位の水温に耐えられるのか分らないが、湖の水温が高ければ生物として心持よいであろうか。しかし釣人は湖が氷結して、氷上での公魚釣を楽しむのだ。あいにく今年は暖冬で湖が結氷しない。釣の愛好者にとっては残念千万、この上ない仕儀である。しかし釣られる方の公魚にとっては有り難い暖冬で、恐ろしい釣人が来ない。それを作者は「命拾ひけり」と俳諧化したのである。

仏心はまあるきものよ寒雀

川端 正紀

仏心がまあるいものかどうか分らないが、形で表すしたら球体であろう。丸という安堵の形は全能、万象の極の形と考える。信仰というものを形に表すことは出来ないが究極の形は球の状態であろう。

仏心をまあるきものと言ったのと、無心に遊ぶ寒雀の拳ほどのやわらかな丸い姿がよく合っている。

早春や二色で足りる風景画

青木 翠亭

四季の中で一番待たれるものは春である。寒い冬を終って春は必ず来ると思うと心が華やぐ。

早春のスケッチは若緑と黄色をパレットにしぼり出して鉛筆の原画の上を、濃く淡く、大胆に色を置けば精巧な画は描けなくとも、春を引き寄せることは出来る。

時おり吹く風はまだ春寒でそう永くはとどまれない。

鮪の尾糶の証に断たれけり

中澤 弘

この鮪は河岸に下ろされた荷受会社の大鮪だ。魚河岸の糶は午前四時頃から始まる。従ってそれを糶り落すのは、仲卸しという小売商に下す前の業者だ。東京都の鑑札持ちで店に若い衆を何人か抱えている。糶卸すと、屋号を書いた紙を切り離れた鮪にはる。尾を切られた鮪はそれぞれ小揚げの小車を曳いて引き上げてゆく。河岸の朝は活気に満ち、昔から一日千両動くのは三つあって、その一つは河岸だそうである。

初湯して日本人とぞ思ひける

向井 芳子

日本人は風呂好きと言われているが本当でしょう。清潔好きな日本人はシャワーの快適さより、どぶんと入って顎までつかる充足感を好むのか。シャワーの方が合理的で汗を流すだけでよいというのにはよいが、そこまで体を濡ら

すとバスタブに入りたくなる。

初湯はまた年改って格別の感がある。今年は何を致そうか、初湯の中で考えるのも心改まるものである。

(以下略)